

COSMOS ロールモデル・アンケート

～研究と子育ての両立をどのようにしてきましたか？～

Vol.1 静岡大学 大村知子教授

1966年3月 お茶の水女子大学 家政学部被服学科卒

1968年3月 お茶の水女子大学大学院 家政学研究科修士課程被服学専攻修了

現在の所属機関・部署名：静岡大学・教育学部

静岡大学副学長(男女共同参画・学生担当)

静岡大学男女共同参画推進室長

お子様の現在の年齢：38歳(男性 既婚) 36歳(女性 既婚 2児有り)

1. 個人的なプロフィール

①小さいときは、どんなお子さんでしたか？

活発・活動的 読書好き

②お茶大を目指そうと思い始めたのは、いつごろからですか？ その理由は？

時期：高校入学直後から家政学に関心があったが、高校1年生の夏(昭和34年8月にお茶大を訪ねた時点)。

理由：1) 自由な男子高校で楽しく充実して学んでいたが、女性教師も不在、家庭科の授業もなかった(50年前の未履修)。学問としての家政学に興味があり、関連著書を調べると大半はお茶大の先生が執筆者であったこと。

2) 高校1年生の夏に沼津から上京してお茶大の事務室(後から学務とわかった)を訪問したのですが、学科目の内容や卒業後の進路など尋ねたとき、女性の方に「それだけ関心があるなら卒業後の進路を考える前に、先ず入学することを目指しなさい」と言われ、「この大学に入れば、道は色々に拓けるのかなあ」と漠然と感じたこと。

③将来的に研究者になろうと思った理由は？ 大学教員・研究者になったのは結果論ですか？ お茶大内で影響を受けた教員や先輩は？

研究の内容が興味深かったことと在学中に大学院(家政学研究科)が出来て進学のお機に恵まれたことも大きな理由。

地方に嫁いで、その時々々のライフステージに叶う通勤可能な地域で大学教員・研究者のポストを得られたことは、地縁・人縁による幸運なめぐり合わせがあった。

柳沢澄子先生が修了後も子育ての期間を忍耐強く見守り続けて、折々の研究会に参加する機会を提供して下さっていたこと(最大の学恩です)。

2. 仕事と子育ての両立について

①産前・産後の休暇は確保できましたか？

2人の出産時は高校の非常勤でした。休暇は専任並みに確保できました

②子育てにどのような協力を周囲からえられましたか？

夫は、時間的には休日のみの協力でしたが、理解と精神的支援が心強かった。

当時は同居家庭(義父母と同居)には保育所への入所資格がなかったので、非常勤に出る時間、さらに子どもが幼稚園に入園した時は短大の専任に任用されていたので、幼稚園のお迎えとその後の保育のために「婆や」を雇用しました(第2子が小1の6月まで)。病気や病後など緊急時は隣の市の実家に預けました。

③一番大変な時期は、子供が何歳位の頃でしたか？

第1子が2～3歳で第2子が0.5～1.5歳の間

④一番大変だったのは、どんな事でしたか？

長男(6歳)が病氣中に学生の海外研修の引率で10日間海外出張をしなければならなかった時

夫が病氣で倒れた3ヶ月間(子どもが2歳と3歳半で、育児と看護と研究調査が重なった)

夫が、単身赴任しなければならなくなった事(2年間)

⑤子どもの年齢に応じた対応(託児所、学童保育など)はできましたか？

私の時代には、整備されていませんでした。

⑥子育てと研究について、各時期のその比率はどうでしたか？

幼児期前期	研究・教育25%	子育て・家事75%
幼児期後期	研究・教育55%	子育て・家事45%
小学校	研究・教育65%	子育て・家事35%
中学校	研究・教育65%	子育て・家事10%、老人介護25%
高校	研究・教育70%	子育て・家事10%、介護20%

⑦両立のロールモデルはいましたか？

職場や身近には居なかったが、大学の研究室先輩にはいました。院に進学する時、自分が両立のモデルになりたいと考えました。

⑧両立のメリットは何ですか？

多様な人間関係ができることと視野が広がる。
子どもが自立し、成長につれて家族関係が緊密になり、介護の協力や手助けを自主的にしてもらえたこと。
女子学生にとって、ロールモデルになれたこと。
最近では、両立してきたことで社会的に評価されるようになったこと。

⑨成功の秘訣は何と考えていますか？

健康と体力と柔軟な考え方、夫や子どもたちの理解と協力
育児の期間が短かった(2児の年齢差が1歳半だった)こと
金銭的に解決できることは時間も労力にもカバーして費やし、経済性を考えないで研究活動を進められたこと。
研究することや教えることが好きだったこと。
子育て時に勤務していた大学は、自宅からも近く、子どもの小・中学校に隣接していたこと。

⑩研究に専念できるのは、子供が何歳位のときからでしたか？

本当に専念できたのは大学生になってからでした。
ただし、私の場合は、子育て終了前(娘が中1の時)に、姑の認知症介護が始まり、子育て期間並みの18年間続きました。

⑪周りの男性の理解はありましたか？

夫と実家の父以外は、ほとんどなかった。
地域、夫の職場、前任の大学においても大半は、理解がなかった。

⑫具体的に困ったこと、不都合なこと、苦勞したことは何でしたか？

幼稚園での降園時に「お母さんが働いていてかわいそうね」という子どもへの(ありがた迷惑な)声かけ。

前任校では、女性既婚者への偏見が残っていたことや単身者女性上司の価値観・生活スタイルの違いによる軋轢が多く、子どもの病気や学校行事参加などへの対応に必要以上の神経を使わなければならなかったこと。

夫の昇進(金融関係のトップ)において「妻をいつまで働かせているのか？」との圧力に夫婦で耐えたこと。

静大では、遠距離通勤による時間のロスがあり、家族と過ごす絶対的時間が少なくなるのを防ぐためにかなり早期からITの活用などでカバーを試みてはきたが、時間のロスと体力の消耗あわせて経済的負担も大きかったこと。

⑬自分なりに工夫したこと、何か後輩に伝えたい手法があれば教えてください。

仕事の効率化とゆとりの計画(出来ることは極力前倒しで)によって実行し、自分の時間はもとより周りの人の時間も大切にすることは、周囲からの信頼と理解をえて、研究も教育も進めやすくなったように思います。

研究テーマについて基本はブレないようにしながら、その時々ライフステージによって期間設定や重点事項などを少しずつ変えながら、継続性を確保したことによって、トータルすると男性とそれほど変わらない成果を得ていると思います。自分の研究スタイルに納得しながら、あせらなかつたことが現在に至っている一因だと思います。

損得などを抜きにして、研究のネットワークを大切にしてきたことが、貴重な財産(力)になっています。

⑭助けられたこと、うれしかったことは何ですか？

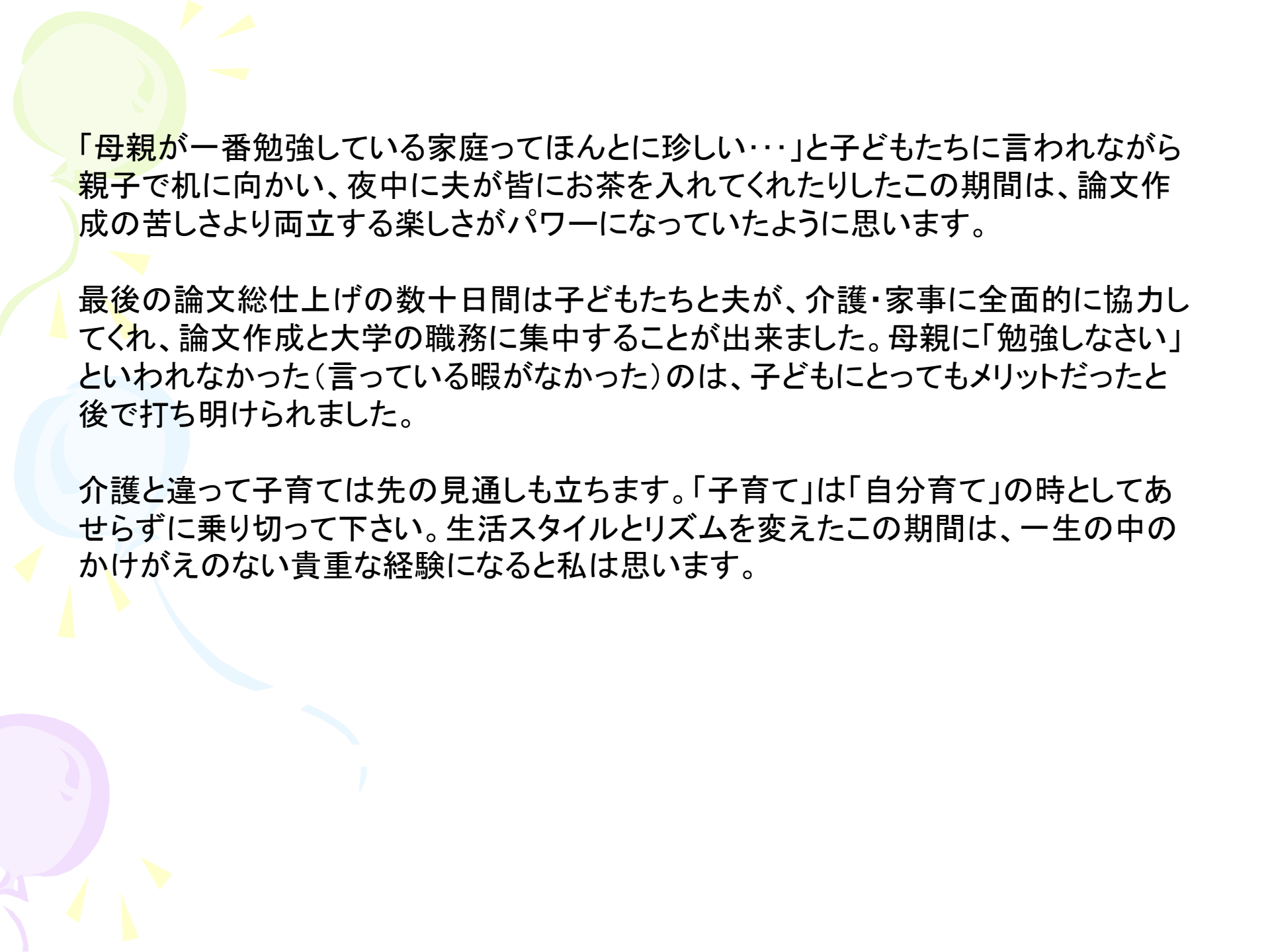
うれしかったこと：

静大に割愛要請があった時、静大の学部長から「静大では、研究者・教育者としてはもとより、母・妻・嫁としての生活者の総合的なモデルとして、教員を目指す女子学生に是非とも必要なのです。」と言われたこと。なぜなら、子育て経験と子どもたちがそれなりに育っている結果への評価、家庭人としての評価など、これまでの「あれか、これか」ではなく「あれも、これも」と努力していたことが自分の知らないところで認められていたからです。

⑮今子育て中の研究者に一言。また、今後への提案があればお書きください。

研究の加速の仕方は、一人ひとり違っていいと思うし、そのタイミングも人によって課題によって同じではないと思います。

私は、Dr論文は受験勉強をする息子や娘と机を並べて書きました。長男が中学生の時、恩師柳沢澄子先生からDr.論の指導をしていただける近藤四郎先生をご紹介いただきました。ちょうど暖めて少し準備もできていたテーマもあり、長男の高校入学と同時にDr論文の調査を開始しました。3年目（長男が高3、長女が高1）に提出を勧められましたが、私にとっての1年と子どもにとっての1年の意味を考えて大学受験のペースを乱さないことを優先させ、長男が大学生なったのを見届けて提出しました。



「母親が一番勉強している家庭ってほんとに珍しい…」と子どもたちに言われながら親子で机に向かい、夜中に夫が皆にお茶を入れてくれたりしたこの期間は、論文作成の苦しさより両立する楽しさがパワーになっていたように思います。

最後の論文総仕上げの数十日間は子どもたちと夫が、介護・家事に全面的に協力してくれ、論文作成と大学の職務に集中することが出来ました。母親に「勉強しなさい」といわれなかった(言っている暇がなかった)のは、子どもにとってもメリットだったと後で打ち明けられました。

介護と違って子育ては先の見通しも立ちます。「子育て」は「自分育て」の時としてあせらずに乗り切ってください。生活スタイルとリズムを変えたこの期間は、一生の中のかげがえのない貴重な経験になると私は思います。

3. キャリア形成について

- ①ロールモデルから、どのようなことが参考になりましたか？
(人物、時代背景、家族の協力など)

明朗で快活な人柄と努力の裏付けによって自信をもって生きることが重要であるとの再認識が出来たこと。

- ②後輩に経験させたいこと、経験させたくないことを具体的にお書き下さい。

お茶大には、「女性だけだからこそ経験できること」や「お茶大ならではの学び」がたくさんあります。「お茶大だからこそ」の特徴をフルに活かしながら積極的にチャレンジして欲しいです。期待しています。